

水沢高等学校は本日、創立 109 周年を迎えました。1911 (明 44) 年 4 月 15 日の「胆沢郡立実科高等女学校」として開校しています。1913 (大 2) 年 3 月には第 1 回卒業生 15 名を送り出しました。1948 (昭 23) 年 4 月に男女共学の「岩手県立水沢高等学校」となりました。

以後、現在私たちが使っている校舎のことを中心に、水高の歴史を記載しました。

1952 (昭 27) 年 龍ヶ馬場に校舎が完成し、堀ノ内 (現水沢小学校の場所) から移転

1968 (昭 43) 年 第 1 体育館竣工 (現在の建物で 1 番古いものです)

1969 (昭 44) 年 理数科設置 弓道場竣工 (1970 年岩手国体弓道競技会場となる)

1976 (昭 51) 年 柔剣道場竣工

1977 (昭 52) 年 現在の校舎竣工

1981 (昭 56) 年 卓球場竣工

1985 (昭 60) 年 第 2 体育館竣工

1990 (平 2) 年 創立 80 周年 「志学館」竣工

1995 (平 7) 年 運動部室竣工

1997 (平 9) 年 吹奏楽部室「奏龍館」竣工

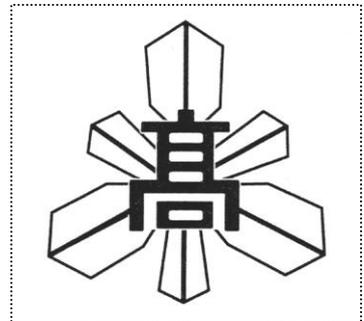
2000 (平 12) 年 「水龍館」竣工

2010 (平 22) 年 創立 100 周年 「昇龍館」竣工

卒業生は約 2 万 3 千人にのぼります。本校には 9 名の同窓職員がいます。

## 【 校章 】

1948 (昭 23) 年に制定されました。作成者は岩淵慶次郎先生 (1948~50 年本校職員) です。概形は「雪の結晶」を表し、「蛍雪の功」を象徴しています。結晶 3 つはそれぞれ「自主的精神」「科学的精神」「清潔な精神」を、結晶を貫く実線で「水」の文字を表しています。ここに学ぶ生徒は将来の平和日本 (白色)・文化日本 (金色) の形成者たらんことを込めているとされ、第二次世界大戦の廢墟からの復興を期す、澁刺とした精神を見ることができます。



## 【 校歌 】

1952 (昭 27) 年、詩人の草野心平氏に作詞を、伊藤翁介氏に作曲を依頼し、1953 (昭 28) 年に完成しました。草野心平氏は「苦心の力作、五七、五七と進み、それに七七調に変えて抑揚をつけた。これは新しい試みです。どの学校の校歌よりもよくできました。」と語っています。

## 【 モットー「友愛・清新・気魄」 】

1960 (昭 40) 年 2 月、生徒会長からモットー作成が提案され、総務委員会で作成を決定しました。ここには「生徒会とは真に我々の姿を追求する場でなくてはならない。誰もが関心を持って参加でき、自己を鍛え、集団生活の秩序を身につける場でなくてはならない。それがために私達は今、水高生としての意識の統一をはかり永久なる水高精神の伝統となるものを私達の手で築こうではないか」とあり、10 ヶ月にわたる議論の後、1965 (昭 40) 年 12 月臨時生徒総会での投票を経て、モットー「友愛・清新・気魄」が誕生しました。

## 水高の思い出 …同窓職員から

(同窓職員が順次担当します)

佐藤 貴之 (昭和60年3月卒業)

私が高校生だったころの水沢高校は1学年7学級(310人)の学校でした。入学時は普通科6学級と理数科1学級、2年進級時に普通科が文系4学級と理系2学級に分かれ、3年進級時に普通科が国公立大志望2学級と私立大学志望2学級に分かれました。

当時は、良くも悪くも「プライドが高い」のが水高生でした。「水高生ぶらずに、水高生らしくしろ!」といわれました。

良くも悪くもの「悪く」は・・・街を歩く様子が肩を怒らせているようだといわれていました。日高火防祭の夜の相打ちの後に、駅通りのゴミ拾いを有志が行いましたが、その締めにマルサンデパート前(現 水沢グランドホテル前)で校歌を歌い上げるのでした。ゴミ拾いはけっこうだが、校歌をその場で歌う必要があるかと批判を受けました。

「良く」は・・・他には負けないという気概がありました。

先生方は、模試の結果がでるたびに「今回は1位 盛一、2位 盛三、3位 関一、水高は4位じゃないか! 関一に負けたぞ!」と生徒を煽るのです。授業でも「おまえ、その調子では、進学先は文理(文理予備校 現在の河合塾仙台校)か? 代ゼミか?」などこけ落とされ、それに私たちは奮起したものです。

東北大学に合格し進学したのに、7月あたりに退学して翌春に早稲田大学に合格し、入り直す生徒がいたり、私大が国公立の滑り止めではなく、最初から早稲田、慶応、同志社等々の難関私大を目指す生徒が多くいました。そのため、「私立文系クラス」もあったのです。

学校や社会に批判的な目を持つ生徒も多かったと思います。生徒会誌『みずこう』には、投稿として社会的なテーマを扱った意見文が掲載されたことも多くありました。社会を背負おうとする熱気を持った生徒が多くました。

運動会では紅白軍それぞれの有志が、高さ10メートルもある張りぼてのシンボル(ペガサスとか、金太郎とか・・・)を、10日ほど前から部室に泊まり込んで制作しました。「泊まり込んで」に疑問を持つと思いますが、生徒は先生方に隠れて泊まり込み、保護者は認め、先生方はそれを知った上で問題を起こさないと信頼して黙認していたのです。そういうふうにして、その規模のシンボルを自分たちだけで作り上げるパワーがありました。

私たちの時代にはもうなくなりましたが、かつては期末考査を監督の先生なしで行っていたそうです。監督がつかなくともカンニングをしない生徒のプライドと、それを信頼する先生方がいたのです。

30余年過ぎ、社会は変わりました。生活の形も変わりましたが、そのような精神は変わって欲しくないと思います。残念ながらみなさんに接していて、この点では頼りなさを感じます。

例えば・・・応援歌練習の最中です。応援の中で男子が「オス!」といい、女子は深々と「お辞儀」をしますが、皆さんはそれを奇異に感じませんか? 昨年は某医科大学でおこなわれていた女子受験生への差別的な扱いが問題となりました。「男子が上」とするような旧態依然とした慣行が生活の諸場面であります。ここで、なぜ女子が「お辞儀」なのか。そのようなことに疑問や批判を持つ生徒が出て欲しいと思います。些細なことに気づく視点が、社会を変えていきます。

皆さんに、水高生であるという「プライド」はありますか?